

唯物論を、公器が子供や民衆に宣伝することは犯罪である

Greatchain

March 5, 2024

この表題で言っていることは、我々の社会の前提であり真理として、認められなければならない。なぜなら唯物論が学者や学界派閥などの、論争の道具である間はよいでしょう（そして、この遊び道具はアカデミーでは許されている）。しかし、ダーウィニズムのような唯物論が、民衆の価値観を決定し、彼らの生き方や運命を左右することが十分想定されるときには（特に年少者において）、断じてそれは許されない。

私はこれを、まず誰より NHK に対して申し上げたい。我々の精神年齢がまだ十分に発達していなかったときには、それはやむを得なかったかもしれない。ほんの 50 年くらい前でも我々は、実はまだ、このことを十分に判断できる年齢に達していなかったと言っている。しかしその後我々は急速に成長した。すなわち時代が変わった。

いまユチューバーの間で急速に起こっている、靈的現実（神やサタン）をどうとらえるかの問題を取っても、唯物論（無神論）を唱える者は、リチャード・ドーキンズなど、ごくわずかの例を除いて、ほぼ皆無である。人々はあらゆる問題を提起しているが、靈的現実そのものを否定する人は、ほとんどいないと言ってよい。これは人々が精神的に目覚めてきたからである。

これは私が最近二度にわたって説明した、ある教団の教えと**非常によく似ている**。彼らは、我々人間は霊も魂も持っていないのだと言い、これを事実だと主張する。我々はそれを聞いて非常に不安になり、目の前が真っ暗になるかもしれない。しかしこれは彼らの布教であって、彼らは責任ある公器ではない。不愉快なら話を聞くのをやめればよい。しかしそれと同じことを、NHK という公器がやっている。そしてこの 2 つの宣伝に共通することは、唯物論というものが一つの「魂胆」すなわちアジェンダをもっている、という事実である。民衆を暗愚の状態、眠った状態にしておかなければ困る人々が、背後にいるのである。そして現在、唯物論によって有神論（宗教とは意味が異なる）を攻撃するなどということは、非現実的で全く意味を持たない。

そこでまず私は「**スティーヴン・マイヤーのビデオ〈進化：バクテリアからペーターベンまで〉**」を、すべての関係者に読んでいただきたい。これは 2019 年 10 月の話で、4 年

以上も前のものだが、報告されたこの活況から、我々日本人がいかに遅れた、井の中の蛙であるかがわかるであろう。<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/191028.pdf>

もう一つ同じ時期の私の記事「創造者の存在を指し示す宇宙的微調整と、言語としてのDNA」も読んでいただきたい。<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/190709.pdf>

しかし、それよりもっと前、まだスティーヴン・マイヤーの有名な Book of the Year『細胞に書きこまれた署名』などが出る前の、私のある雑誌記事を読んでいただきたいのだが、あいにくこれは、まだ記事がデジタル化される前のものである。

私はその頃、アメリカから次々に発信される Intelligent Design 理論を、日本の読者のために翻訳し紹介していた。その雑誌は『世界思想』といい、私はこれに6年間も連載し続けた。そしてDNAやゲノムの性質として、目を覚まされ今でも驚きとして残っているものがある。それは、2007年12月号の「有神宇宙科学と無神宇宙科学——今、明瞭にものが見えるようになった」という記事の、後半3分の1あたりである。

その頃まだ、1953年の、ワトソンやクリックといったDNA構造の発見者が、自分の発見したものの意味がよく分かっていない、ということがあったらしい。遺伝子という生命体の形質を指示する、細胞内のコードは、長年の唯物論的思考癖によって、1対1の対応によって、量的に決定されるものと思われていた。地球上で最も発達して複雑な生物は人間だから、人間の遺伝子が最大の量（長さ）をもつはずで、これを解読して整理するには膨大な時間と手間を要すると思われていた。

ところがこの調査は意外なことに、簡単に終わってしまった。それどころか、ツキミソウ？とかヨイマチグサ？のような、はるかに下等な植物が、人間よりも長い遺伝子をもっていた（この辺、不正確なことをお詫びする）。これは遺伝子やゲノム解釈が、全く見当違いだったことを意味する。それは機械的だが機械ではなかった。そのあり方がマイヤーの Signature in the Cell という書名にあり、それぞれの生物種には、それを創造した創造主の署名が記されているということである。

以下、私の驚き感動した自然界の不思議な事実を、私のかつての翻訳と説明文のままに掲載する――

遺伝子と体構造の間に対応関係がないという事実は、生物の身体全体というだけでなく、脚（突起した移動器官）だけでも当てはまる。いろんな種類の動物間で共有されている発生遺伝子の一つに、Distal-less（末端アル/ナシ）という遺伝子があり、これはショウジョウバエでこの遺伝子に変異が起こると、脚の発生が妨げられることから

この名がついた。(Distal とは主要部分から離れた末端を意味する。) これに非常によく似た DNA 配列をもつ遺伝子がネズミに見つかった。実は Distal-less とよく似た遺伝子は、ウニや、トゲのあるミミズ (地中のミミズと同じ門)、カギムシ (ビロード状ミミズ、全く別の門)、またチョウ (蝶々) においても発見されている。これらすべての動物において、遺伝子 Distal-less は、「付属肢」の発達に関わっている。しかしこれら 5 種類の動物の「付属肢」は、構造的にも進化的にも相同ではない。(ジョナサン・ウエルズ『**進化のアイコン——破綻する進化論教育**』116 頁)

「構造的にも進化的にも相同ではない」とはどういうことか? これは図のように、同アシと言ってもアシの種類がまったく違うということである。これは「移動手段」ということであって、ちょうど我々が、車をもっていないことを「私にはアシがありませんので」などという場合の「アシ」と同じ概念である。これはプラトンの「アシ」という (物的実体のない) アイデアが、自然界には現実に存在することを意味する。

こうしたことは、一つの生命体から、偶然の変異と自然選択の力だけによって、この生命世界ができたというシナリオよりも、最初にロゴスがあり、構想、アイデア、目的があって、それによって世界が創られた——芸術作品と同じように作者によって創られた——とするシナリオを、遙かにより有力なものにする。しかもこうした遺伝子の事実は、移行種のない化石の事実、宇宙的微調整の事実、還元不能の複雑性の事実などと、符節を合わせることによって、強力な証拠となって、一つの超越的な「叡智」の存在を指し示すのである。

そして『**意味に満ちた宇宙**』(我々の翻訳書の一つ) が言うように、ひとたび心を開いてこの世界を、深い叡智による、複雑で美しく、難解だが、人間によって解説されるように意図された作品として、とらえるならば、今まで絶望的に不可能とされた謎が、解明されていくだろうと予測できる。これは世界を敵とする唯物論科学とは全く別の、新しい科学の出発だと言っていいだろう。人間は神に創造され「善のアイデア」「美のアイデア」を神と共有している。これは一つの信仰であるが、間違いなく事実に基づいた信仰である。